



九州体育・保健体育ネットワーク研究会2019 ファイナルin福岡



—体育・保健体育科における主体的・対話的で深い学びの実現—

2019. 3. 3 (SAT) アクション福岡

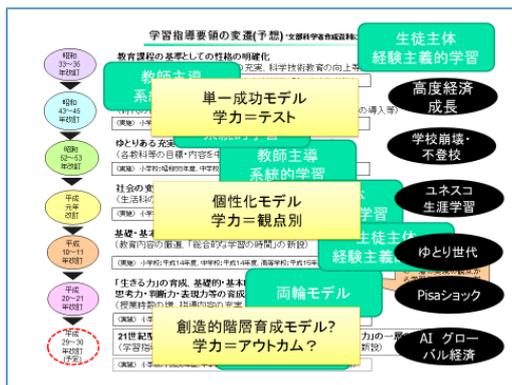
全国の体育科・保健体育科教育に関わる有志が、新学習指導要領への理解、体育学習や保健学習に関する授業力の向上、新学習指導要領への理解、体育学習や保健学習に関する授業力の向上、教育課程編成等体育科教育の充実に向けて話し合う機会とし、九州から全国へ実践ベースの情報を発信し、全国の体育・保健体育ネットワークを深めるという目的でスタートした研究会も2019で8年目を迎えました。今やこのネットワークも、九州・日本を飛び出し、台湾や韓国にまで広がり始めています。



今年度も3月2日(土)に開催し、前日の国際交流：単元構造図ワークショップを併せ、延べ204名が福岡県立スポーツ科学情報センター(アクション福岡)に集いました。本当に、参加いただいた皆さん、開催に携われたすべての方々に感謝いたします。

第1部 シンポジウム「体育の学習評価を考える」資質・能力の3つの柱と学習評価

国立教育政策研究所 高橋修一先生、埼玉大学 石川泰成先生をパネリストにお迎えし、桐蔭横浜大学 佐藤 豊先生のコーディネートでシンポジウムを行った。内容は学習評価について、新学習指導要領の内容に関わる最先端の情報提供であった。



昨年11月にまとめられた「児童生徒の学習評価の在り方について(これまでの議論の整理)」では、「学習指導」と「学習評価」は学校の教育活動の根幹であるとし、学習評価に係る取組をカリキュラムマネージメントに位置付けることの必要性を基本的考え方で示している。

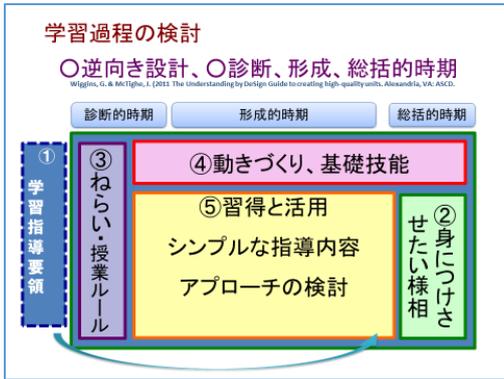
答申では、「観点別評価については、目標に準拠した評価の実質化や教科・校種を超えた共通理解に基づく組織的な取組を促す観点から、小・中・高等学校の各教科を通じて、『知識・技能』『思考・判断・表現』『主体的に学習に取り組む態度』

の3観点に整理すること」とされている。

体育分野では、技能は、「運動の技能」として定義し、「(運動)ができる」ことを重視してきた。できる体験は、「次のできるようにになりたい」という意欲を生み、同時に結果として国民の体力の向上という効果を生み出してきたともいえる。一方で、運動ができない児童生徒にとっては、体育の時間を苦痛に感じ、できなければよい成績が得られない教科としての負の認識を生み出しており、運動が苦手な児童生徒への様々な手立てを講じてきたともいえる。

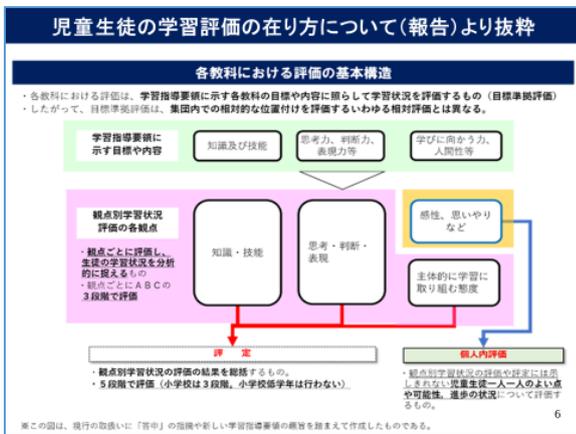
Bloom Taxonomyの主要次元		
認知的領域 (1956)	情意的領域 (1964)	精神運動的領域 (1969)
1.知識 2.理解 3.応用 4.分析 5.総合 6.評価	1.受け入れ 2.反応 3.価値づけ 4.組織化 5.個性化	1.模倣 2.巧妙化 3.精密化 4.文節化 5.自然化

その中で、観点別学習状況評価に基づく「目標に準拠した評価」の導入は、技能のみならず、知識・理解（わかること）や考えること（思考・判断）、運動やスポーツにフェアに取り組んだり仲間と支え合ったりすることによって、より学習成果が得られるという運動そのものが内包する教材の有する可能性と融合しながら、「多面的に児童生徒の良さを評価する」取組みとして深化してきた。Society5.0などの



新しい時代へ対応する資質・能力の育成が教育全体の目標としてより明確化された学習指導要領の実現に向け、体育の果たす役割とその独自性をどのように整理するかが求められている。知識・技能という観点では、知識と技能の評価方法の考え方をどのように進めるか、思考・判断という観点を思考・判断・表現との違いは何か、主体的に学習に取り組む態度で言及された「メタ認知」と体育固有の態度の指導と評価等について意見交流がなされた。

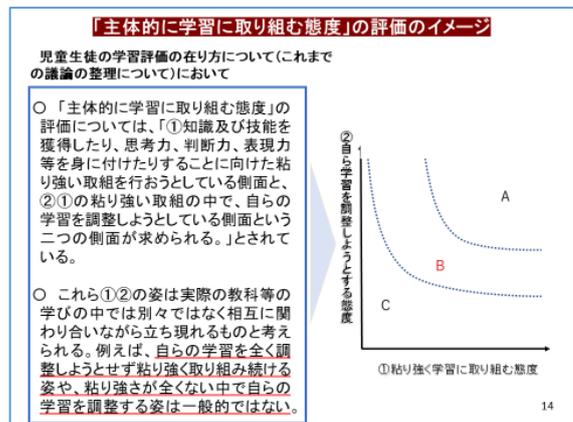
(1) 児童生徒の学習評価の在り方について(報告)のポイント 国立教育政策研究所 高橋 修一先生



今年1月21日に開催された中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において、「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」を取りまとめられ、子供たちの学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、学習評価の在り方が極めて重要であることを説明された。また、学習評価は、子供の学びの評価にとどまらず、『カリキュラム・マネジメント』の中で、教育課程や学習・指導方法の評価と結び付け、子供たちの学

びに関わる学習評価の改善を、更に教育課程や学習・指導の改善に 発展・展開させ、授業改善及び組織運営の改善に向けた学校教育全体のサイクルに位置付けていくことが必要であることの説明があった。

「知識・技能」の評価は、各教科等における学習の過程を通じた知識及び技能の習得状況について評価を行うとともに、それらを既有的知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり、技能を習得したりしているかについて評価するものであること、「思考・判断・表現」の評価は、各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価するものであること、「学びに向かう力、人間性等」には、「主体的に学習に取り組む態度」として観点別評価を通じて見取ることができる部分と観点別評価や評定にはなじまず、こうした評価では示しきれないことから個人内評価を通じて見取的部分があることを説明された。



(2) 改訂学習指導要領から考える学習評価の充実

埼玉大学 石川 泰成先生

なぜ、学習評価の充実なのか？

- 各教科等において何を教えるかという内容は重要。
- これまで以上に、その内容を学ぶことを通じて「何ができるようになるか」を意識した指導が求められている。
- 資質・能力を効果的に育成するためには、**教育目標・内容と学習評価とを一体的に検討する必要がある。**

改訂学習指導要領から考える学習評価の充実についてご教授いただいた。学習評価については、学習指導要領にほぼ書き込まれているので、その中で学習評価の充実のためにどう考えていくのかを一緒に考えようということであった。

まず改訂学習指導要領では、各教科等において何を教えるかという内容は重要であり、これまで以上に、その内容を学ぶことを通じて「何ができるようになるか」を意識した指導が求められていること、

資質・能力を効果的に育成するためには、教育目標・内容と学習評価とを一体的に検討する必要があるということであった。新しい学習指導要領等に向けては、以下の6点に沿って改善すべき事項をまとめ、枠組みを考えていくことが必要となるということであった。

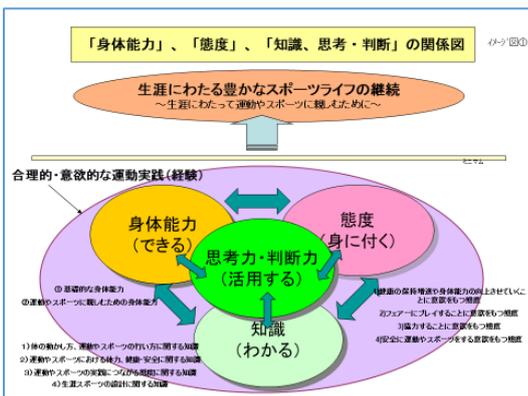
- ①「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)
- ②「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)
- ③「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)
- ④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」(子供の発達を踏まえた指導)
- ⑤「何が身に付いたか」(学習評価の充実)
- ⑥「実施するために何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)

また、何が身に付いたかということは、学習評価の充実が必要であり、学習評価の意義をしっかりと理解し教員が指導の改善を図ること、子供たち自身が自らの学びを振り返って、次の学びに向かうことができるようにすることが大切であるということであった。

それを具現化するためには、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性を持った形で改善を行うこと、子供たちが、前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかを捉えること、毎回の授業で全てを見取るのではなく、単元や題材を通じたまとまりの中で、学習・指導内容と評価の場面を適切に組み立てていくこととのことであった。



(3) まとめ 桐蔭横浜大学 佐藤 豊先生



軸になっている資質・能力論から考えるとどのような人を育てたいのかという視点になることや何ができるようになるかということは児童生徒目線にあり、教師目線になると何を身に付けさせたいのかということになる。この両面から授業を創造していくことが大切であるということであった。このことは学習評価と絡めて重要になるということであった。

学習評価とはなにか。評価とは、ある価値や目的を基準

にして、ある事象、現象、行動等を観察し、そこで得られた資料について解釈や意味づけを行うことであり、児童生徒にとっての達成状況を明らかにし、次の努力目標となるものにしていくこと、教員（自分自身）にとっての指導改善のための情報になりうるものになることが重要でということまとめであった。

第2部 ポスターセッション・ブース展示、教育・行政・研究の情報交換

今年は過去最高のポスター発表で、学校現場の先生方の実践発表をはじめ、各県の特徴を生かした取り組み、大学生の研究発表、その他、学習評価や教材開発等、幅広い分野・観点からの発表が27本、台湾師範大学の学生からも11本であった。ブースごとに熱心なプレゼンテーションが行われており、まさしく主体的・対話的で深い学びが展開されていた。まずは大人からこの深い学びを体感し、実践していかなければならないと感じた。



講評：安田女子大学 徳永隆治先生

授業づくり、指導法の具体的な手立て等の内容、特別支援学校、体力づくり、保健、幼児遊び、カリキュラムなど多岐にわたっていた。これからの体育の授業の目指すものが垣間見られた。深いリサーチがされており、学会でも発表できる内容であったので、もっと深めていってほしい。多岐にわたっているのでセッションごとにまとめるなど深い学びにつなげるようにしたら更によいのではないかと感じた。

講評：熊本大学 坂下 玲子先生

午前中のシンポジウムの新しい学習指導要領の考えを思い起こしながら、いい授業をしなければいけない思いで研究を深めてられたのではと深く感じた。またフロアの方々とのディスカッションで更に研究が深まっていったと思う。多くの学生のポスターセッションがあり、新の時代を担う新しい指導者に期待したい。

ブース展示は、大学で研究されている剣道授業支援ツールや小学校体育専科の先生の原点回帰とノーマライゼーションを融合した体育道具、JADA、体づくり運動アプリ、学校向けWi-Fiルーター、部活動における動画添削システムなど数多くあり、今からの体育授業のICTの活用、運動用具の工夫の更なる研究の重要性を感じさせられた。



第3部 小学校体育専科の実践から学ぶ

4人のパネリストの実践から小学校のみならず、全ての校種で参考となる体育の授業づくりの内容が紹介され、愛媛大学の日野克博先生のコーディネートと熊本の香山 悟先生の指定討論でシンポジウムが進められた。

(1) 大分県の体育専科の取り組みと実践事例 日田市立有田小学校 岩崎 敬先生

指導者の高齢化、意識の停滞、指導力の低下、推進役の不在、用具等の環境不備等の現状を解決するために、H21に6人の体育専科教員が県費で配置された。現在、24校24名が配置され各学校・地域での体力向上の推進を行っている。体育に関する環境整備・校内研修や市町での研修会、体育通信などの情報配信、一校一実践、業間・昼休みなどの取組の工夫を行い、体育の推進を行っている。

体育専科教員は、単元の初めを担い残りは担任が行うとかTTで行う、今年度は体育専科教員が行い次年度は担任が行うなど、様々なパターンで授業展開を行い体育専科教員の支援の在り方を探っている。

授業では目標の設定や学習カードの活用方法や記入方法の支援を行うなど、発達段階に応じた支援の在り方ができている。共生の視点を持たせるためにゲーム分析をさせるなど共生社会の形成を目指すなど、体育専科教員ならではの授業づくりができている。一番大切にしているのは、体育が好き・体を動かすのが好きという運動有能感を高めることではないかと感じる。

九州体育・保健体育ネットワーク研究会
福岡ファイナルラウンド シンポジウム②
「小学校体育専科の実践から学ぶ」

大分県の体育専科の取り組みと実践事例

J1復帰 大分トリニータ
開幕戦勝利！



日田市立有田小学校
体育専科教員 岩崎 敬
2019.3.2 アクション福岡

(2) 愛媛県体育専科の取組 宇和島市立鶴島小学校 濱本圭一先生

1 県全体へ向けた取組
(3) 具体的な取組

- PT (プロジェクトチーム) 会議
 - ・授業づくり・実技研修
 - ・体力向上の取組 (体力アップ推進計画)

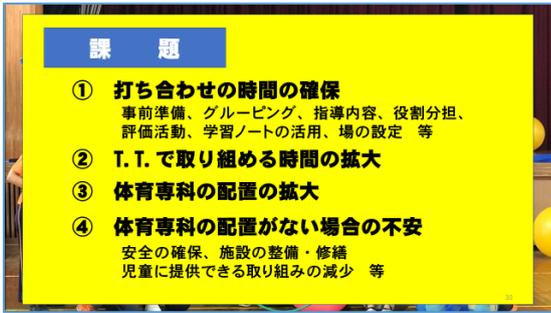


子どもの体力低下に歯止めをかけるために平成19年度から体育専科教員が配置され、現在38校51人が配置されている。

体育専科教員はプロジェクトチームを作り、授業づくり・実技研修・体力向上の研究を行っている。また実践事例集を作成するなど体育専科教員がチームを組み体育授業の工夫改善を行っている。

宇和島市立鶴島小学校では、5つのキーワードで体育授業の充実を行っている。全学年が同じ時期に同じ領域・運動の学習を行っている。また体育専科教員配置校には、アドバイザー派遣事業もあり体育授業の質の向上を図っている。本校では、教材の工夫、学習過程の工夫、学習形態の工夫を視点を置き体育授業の工夫を行った。ミニハードルでのシンクロリズム走から教え合い学習につなげるなど、指導内容の工夫や改善は体育専科教員が配置されていることからできるものとする。また学級担任と体育専科教員の基本的な立ち位置を明確にすることで、楽しい体育の実現ができるものとする。しかし学級担任と学習指導要領の内容をしっかりと確認、共有することも大変、大切であるとする。また、地域におけるスポーツ関係者団体や愛媛大学との連携を行っているなど、このような取り組みで体力が向上した。

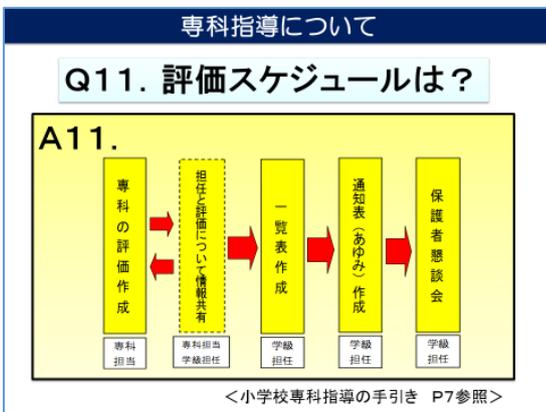
(3) 小学校体育専科教員の取組 糸満市立西崎小学校 照屋謙二先生



沖縄の体育科教育の充実と体力の向上の大きな柱で体育専科教員は配置されている。まずは先生方に運動の楽しさを体験していただき、授業実践に活かしている。本校での取組は、教材・教具の作成や準備を行っている。スポーツ少年団に入っていない子供たちを対象に夏休みに陸上教室を開いて、運動が苦手な子供を少しでもなくそうとした。校内に体力づくりチャレンジサーキットを作り、

日常の中で、いろいろな運動にチャレンジできる場の工夫を行っている。このことでいろんな運動にチャレンジする気持ちが育ってきた。チャレンジサーキットの中のケンパーランドは沖縄での6地区共通の取組になっている。授業では、コート設営・教材教具の補修・点検整備など、体育専科教員が配置されていることからこそ一層の充実が図られている。体力テストの記録表も伸びが一目でわかるように見える化に取り組んだ。体育専科教員は3年で異動するという現状から、指導資料の整備・教材教具の整備をさらに行っていく必要がある。課題としては、打合せの時間の確保、TTで取り組める時間の拡大、体育専科教員の配置拡大、体育専科教員の配置がない場合の不安の払拭などが考えられる。

(4) 北九州市が現在、考えている体育専科について 北九州市教育委員会 青木哲也課長



体育専科教員への研修などを行い、本格的に H30 から5名の体育専科教員の配置が始まったばかりなので、これからが研究である。北九州市の現状は、年齢構成で大量退職を迎えたものの、求める人材確保ができていない。そのこともあり、教員採用試験での免除項目を設け、広く人材を求めている。また、人材育成のために、教員養成みらい塾や寺子屋一休さんなどの勤務時間外での人材育成を行っている。学校規模で課題がある場合は、低中高の近隣学年での持ち合いや専科制の導入を考えている。中学校教員の小学校専科への異動を行い、専門性を効果的に中学校教員の働き方改革につなげている。理科、英語、体育の教科で中学校教員での専科教員配置を行った。

体育専科教員の活用により、子供の知的好奇心を高めたり、運動量の向上、体力の向上につながった。中学校からの体育専科教員であるため、高い専門性があり、その経験をその他のスポーツ指導に活かせる、企画運営すること力がありマネジメント力がある、生徒指導力をもち集団をまとめることに長けているという効果がある。また児童も、運動に具体的で細やかな指導により体育が楽しくなったとか、中学校から来た先生が教えてくれるので中学校が楽しみという気持ちの変容も見られた。

体育専科教員を配置した学校からは、体力テストの正しい測定方法・要領や動きのコツなどの指導のポイントを共有できた、専門的な体育指導の方法や評価の仕方を知ることができた、児童の輝く瞳を見てスポーツの楽しさを再確認できたなど意見が上がった。

指定討論 熊本県教育委員会 香山 悟教育審議員

4人のシンポジストの発表を聞くと、その有用性や必要性をフロア皆さんと共有できた。では、なぜ自分の県や市に配置されていないのか、どんなハードルがあったのか、活用の課題は何か？という討論

の柱が出された。

パネリストからは、北九州市では、政令指定都市なので人事を市単独で動かせるようになったことや小学校の教員不足をどう解決しようかということが大きな導入の引き金があったこと、沖縄では、本年度3年目であり、国の加配事業からまず3名配置したこと。やはり予算のことが関係するので、授業改善ということの視点を踏まえながら、成果指標を出す必要があるという意見が出された。

課題としては、学級担任との連携の在り方や週27コマ授業をすることもあり体力面で厳しいところがある。体育専科教員として研修をもっと積み、子どもたちが求めているもの、学級担任が求めているものができるようになる力が必要であることや体育専科教員自身がスキルアップする必要があるという意見が出された。

まとめ

体育専科教員の活用には、様々な活用パターンがあることを知ることができた。体育専科教員の専門性が必要であり、技術指導での専門性だけでなく、授業づくりのマネジメント力、ひいては人間力が必要なことを知ることができた。より良い授業を目指していることがすべてに共通することであるので、今からもボトムアップをしながら、授業力の向上が求められることである。

★情報交換会

ファイナルラウンドも延べ204名の過去最高の参加がありましたが、情報交換会もなんと90名以上の参加があり、大いに盛り上がりました。通常ラウンドと同様に各ラウンドの有名地酒が振舞われ、昼間のラウンド以上に熱く語り合うことが出来ました。台湾師範大学、桐蔭横浜大学、福岡教育大学の次の世代の教育を担う若者大学生とも語り合え、日々研鑽を改めて感じさせられました。



○あとがき

今回のファイナルは、体育・保健体育科における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、新しい学習指導要領が求める資質・能力の三つの柱と学習評価について深く考えることができました。佐藤先生の第1部のまとめでもありましたが、子ども目線での「何ができるようになるか」ということと、教師目線の「何を身に付けさせたいのか」という両面の視点から授業を創造していくことが大切であることを再認識しました。

狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く、仮想空間と現実空間を高度に融合させたシステムによる人間中心の社会を指すsociety5.0という近未来の社会。私たち教師は、この時代が求める教育や学びを今求め、探り、この時代を生き抜く子供たちを育てていかなければならないのでしょうか。そのために学習する子供の視点に立ち、「何ができるようになるのか」という観点から、育成を目指す資質・能力をもっと伸ばしていく必要があることを感じとれました。まさしく、学びの質の改善と評価の充実を一体的に深めることになると思います。

来年度も2月下旬に、アクション福岡でファイナルラウンドを開催する予定です。来年もぜひ皆さんと熱く語り合えることを期待しつつ、ご参加していただきましたすべての皆様に感謝します。